

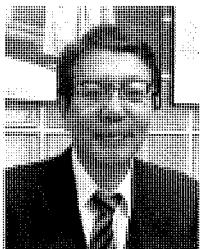
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

永国先生に託されて（下）

ジョン万に英語を習ったある姫君の秘められた生涯

小島 博明



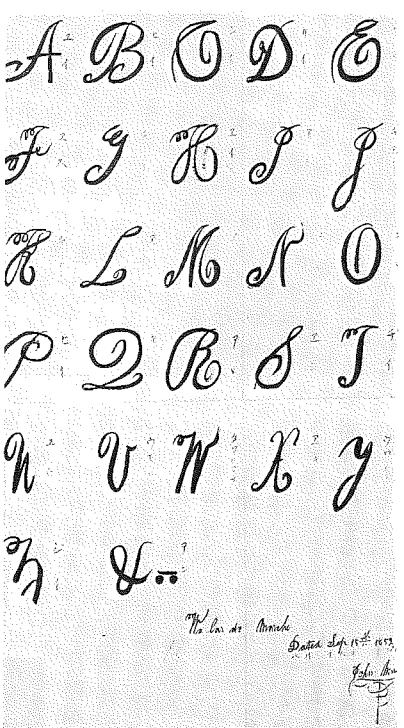
開国の条件を少しでも有利にという幕府の思いが、深尾屋門姫の人生を狂わせていく。幕府の裏作戦はペリーの懐柔であった。たまたま英語が話せたことから屋門姫に白羽の矢が立つた。以後、屋門姫は「深尾」を名乗ること、土佐の国に帰ることも禁じられた。アメリカから帰国したジョン万次郎が日本語を忘れていたことから、彼に日本語を思い出させるプロジェクトに参加し、逆にジョン万に英語を教わりマスターしたのが仇になつた。

遅かつた「紅葉賀」（蒸気船）

その後屋門姫は「深井加尾」と改名する。やがて加尾はジョン万改め「中濱万次郎」が幕臣となり「咸臨丸」でアメリカに行つたとの噂を聞いたりするうちに、自分が外国に憧れていた昔を思い出した。身体が火照るほどの記憶だつたらしい。その思いが加尾を次の行動へと驅り立てて行く。なんと当時、西洋文明花咲く長崎をターゲット立てて行く。なんと当時、西洋文明人相手専用の芸妓置屋の経営であった。言葉が通じないため象二郎と再会する。彼らは貨物局、開成館の長崎出張所（土佐であつた。だが、心底には深尾

家に対する反発心があつたと思われる。

美しく聰明な加尾が、英国人のオールトやグラバーらと親交を深めていくには時間はかかるなかつた。加尾は彼ら商会と取引各藩との売買契約に立ち会い、次第に信頼を得るとともに増々英語力にも磨きがかかり、契約書の作成ができるまでに上達していった。慶應に入るとき、あの、河田小龍に影響を受けたという。坂本龍馬や近藤長次郎ら龜山社中の仲間と出会つた。グラバーらを紹介するとともに取引に欠かせぬ契約書の大切さを教えた。それだけ契約上



ジョン万次郎のアルファベット（複製）

のもめごとが多くつたに他ならない。

やがて懐かしい中濱万次郎、また加尾は「いろは丸事件」の成り行きを見守つていた。御象二郎と再会する。彼らは貨物局、開成館の長崎出張所（土佐であつた。そこで、龍馬に船を贈る

長崎進出である。土佐藩の狙いは特産の樟脑等を売り、一方船や武器を購入する。「富國強兵」は吉田東洋以来の目標であつた。加尾は後藤にボーディンやオールトを紹介した。また、「龜山社中」を土佐藩の下部組織に山社中を紹介した。龍馬は長州や薩摩に多くの人脉を持つばかりでなく、海軍操練所で鍛えた操船技術、それになんといつても河田小龍仕込みの先見の明を持った商才はすば抜けているのだ。加尾から話を聞いた後藤は大きくなづいたと。それがのちの後藤、龍馬の「清風亭会談」につながり「龜山社中」

さらに、加尾の行動はスケールを増していく。東京の吉原遊郭に妓楼を経営する。戦で傷ついた子女の救済のためである。戊辰戦争で深尾一族は大活躍をする。その一方で旧幕府軍についた東北諸藩の子女が悲惨な運命をたどる。多くの子女が吉原に売られた。加尾はその子女の救済を考えた。自らの数奇な運命がオーバーラップする。弱者の目線である。加尾は晩年吉原遊郭内に句碑を建立した。

焚くときは・・・・・

その時代と加尾の思いが切々と伝わつてくる一句である。ただ、句碑は関東大震災で消滅したと伝わる。（終わり）

注 深井加尾さんのご子孫をご存じの方はご報下されば幸いです。

話題人 インタビュー

坂本龍馬家5代目
坂本寿美子さん

「父も龍馬を尊敬しているわ」



—— 嫌いなものや好きなものって他にありますか。
私はお人形作りも好き。まだやりたいことがあるわね。

—— 嫌いなものや

好きなものって他にありますか。

—— より年上だったし、戦争が始まったから学校へ行けなかった。だから学歴がないの。学校時代の友だちがいない。学校は嫌いだったから、よかつたけれどね（笑）。

—— 好きなことを自由に楽しんで

—— 龍馬も学校が嫌い？ へんなところが似てるのね（笑）。

—— そう。もっと勉強したいわね。日本語は苦手だから、フランス語、ドイツ語、英語をもうと勉強したい。外務省や大使館の子どもたちは親の転勤でいろいろな国に行くので、4か国から6か国語をしゃべれるのは当たり前なの。母の話では、私と母は父よりも、（シベリア）鉄道で1ヶ月くらいかけてフランスに行つた。その時にはロシア語を話していたらしいけれど、パリに行つたらすぐ忘れちゃった。

—— 龍馬も学校が嫌い？ へんなところが似てるのね（笑）。

—— そう。日本語は苦手だから、母はおしゃれで社交的。はつきりした人ね。父にもはつきり意見をうし。

—— 私はお人形作りも好き。まだやりたいことがあるわね。

—— 学校が嫌いですか。龍馬も学校は嫌いだったみたいですよ。頭は悪くないと思いますけどね。寿美子さんも勉強は好きでしよう。

—— なくもないけど、そうかといつて特にないわ。

—— 私は好きなことを自由にやってきた。両親には、語学でもスポーツでも好きなことを勉強させてもらつたし。仕事をしていられたけれど、日本の会社（伊勢丹デパート）では男女格差や差別を感じた。奪い合いもあつた。立派な学歴がある人ほど変なことをしたり、妙な嫉妬もある。私はフランスで育つたから相互の比較ができるからね。本でも書こうかと思ったわ。日本語が得意じゃないからやめたけど。

—— フランス人は市民でも政治や経済の話をしつかりするけれど、日本人はしない。日本の政治はどんどん悪くなっているわね。

—— 私の日本語は母のおかげね。父は流ちょうなフランス語、英語、ドイツ語を話すけれど、母は日本語以外使わなかつた。言葉だけじゃなく行儀作法にも厳しかつたわね。素朴な子の持つべきだつたね。

—— 父は子ども時代、継母とうまく行かなくて不幸だったから、家の中で母がリードしている感じだったわ。わが家は三人がお互いを干渉しないの。（私の世代では）変わった家庭環境だったと思うわ。

—— 私は外國育ちのせいか、おひなさまのような古い（日本の）ものに馴染めない。自分の国という感覚があまりないので。中途半端な人間よね。



エールフランス時代=オフィスで

—— 寿美子さんお気に入りの缶コ一ヒーですね。わあ、ブルタブも簡単に開けられるんですね。さすが、スポーツで鍛えられただけはありますね。



スケートに熱中した10代の頃=パリで

—— お久しぶりですね。お元気ですか。寿美子さんとお話をしたいと思って、高知の龍馬記念館から来ました。

—— あら、そう。いいわよ。でも、私は龍馬のことは知らないわよ。

—— 私は元気でやつているわ。帰つたら、テニスをしたいと思っているくらい。まあ、缶コ一ヒーでも飲みましょう。

—— たところ、「この子は7歳くらいでしか生きられない。勉強より運動をさせた方がいい」と言われた父にはテニスを教えてもらつたけれど、パリに行つてからはスケート。毎日スケートばかりしていた。フィギュアスケートの選手時代は忙しかつたわね。朝から晩まで開けても暮れても練習。ついにはペアでオリンピックにはテニスに転向。

—— オリンピックは行けなかつたわよ。でも、もしもなん人も本をたどればいろいろな国の血が混じつていて。フランスで暮らしている以上フランス代表で何ら問題ないこと。さすがフランスね。

—— 戦争が始まつたからね。でも、もしもなん人も本をたどればいろいろな国の血が混じつていて。フランス代表と認めなかつたかもしれないわね。

—— 日本に帰つてからは、テニスに転向。日本に帰つてからは、テニスに転向。

—— 私は日本人だから、フランス代表ということは問題にならない。世論が私を認めたの。どんな人も本をたどればいろいろな人の血が混じつていて。フランス代表で暮らしている以上フランス代表で何ら問題ないこと。さすがフランスね。



さっそくフランス旅行

“龍”馬を生きた「14代目 坂本直道」展は3月末で終了した。

戦後70年。日米開戦回避に向けて独自の反対行動を起こした直道の生涯は、世の中が揺らいでいる今だからこそ、深く私たちの胸を打つ。

龍馬の跡である坂本龍馬家は明治4年（1881）、朝旨によって興され、現在6代目に至っている。このたび4代目の直道を龍馬と重ねて紹介することによって、両者の生き様がより鮮明になったと思う。

そんな二人を一層浮き上がらせるのが、坂本直道の長女で5代目の寿美子さん。大正10（1921）年7月生まれの93歳。高齢のため東京近郊の病院に入院中であるが、お元気で過ごされている。

満州に生まれ、8歳でフランス・パリに移住。19歳で帰国するが、日本は太平洋戦争へと進んでいく。多感な時代に暮らしたフランスはいまだ寿美子さんの記憶、思考、生活、行動から消えることはない。愛するご両親のことも同じである。

今、早く寿美子さんに聞いておかなければならぬ——。

そんなはやる気持ちと同時に、潔く生きる寿美子さんのファンとして、再会を愉しみに、ひな祭前に出かけた。

—— オリンピック？ 昭和10年代初めですね。すごい。フランス代表ですか？ 行かれたんですか？

—— 私は日本人だから、フランス代表ということは問題にならない。でも、世論が私を認めたの。どんな人も本をたどればいろいろな人の血が混じつていて。フランスで暮らしている以上フランス代表で何ら問題ないこと。さすがフランスね。

—— 戦争が始まつたからね。でも、もしもなん人も本をたどればいろいろな国の血が混じつていて。フランス代表と認めなかつたかもしれないわね。

—— 日本に帰つてからは、テニスに転向。日本に帰つてからは、テニスに転向。

—— オリンピックは行けなかつたわよ。でも、もしもなん人も本をたどればいろいろな人の血が混じつていて。フランス代表で暮らしている以上フランス代表で何ら問題ないこと。さすがフランスね。

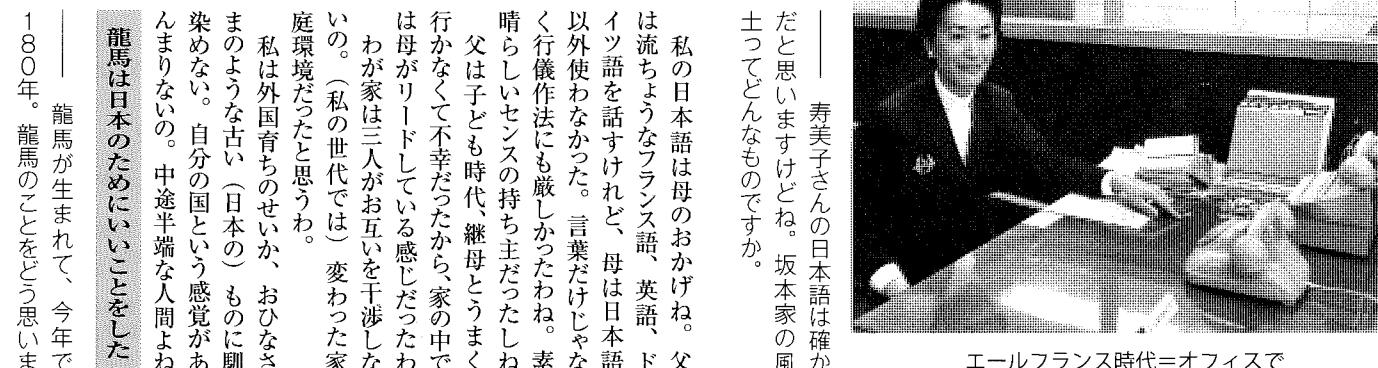
—— 戦争が始まつたからね。でも、もしもなん人も本をたどればいろいろな人の血が混じつていて。フランス代表と認めなかつたかもしれないわね。

—— 日本にはいろんな人がやつて來た。肩書や身分の偉い人であつても、べつに暮らしている以上フランス代表で何ら問題ないこと。さすがフランスね。

—— それでも普通に接するのね。だから悪口を言われることもある。父は抵抗しないけど、相手はいい気になつて父を攻撃する。それでも平氣よ。父は抵抗しないけど、相手はいい気になつて父を攻撃する。それでも平氣よ。父はそんな人も相手にしなかつた。だから、私も同じよ。

—— それでも普通に接するのね。だから悪口を言われることもある。父は抵抗しないけど、相手はいい気になつて父を攻撃する。それでも平氣よ。父はそんな人も相手にしなかつた。だから、私も同じよ。

—— それでも普通に接するのね。だから悪口を言われることもある。父は抵抗しないけど、相手はいい気になつて父を攻撃する。それでも平氣よ。父はそんな人も相手にしなかつた。だから、私も同じよ。



—— 龍馬は日本のためいいことをした。龍馬が生まれて、今年で180年。龍馬のことなどをどう思いました。

—— 私の日本語は母のおかげね。父は流ちょうなフランス語、英語、ドイツ語を話すけれど、母は日本語以外使わなかつた。言葉だけじゃなく行儀作法にも厳しかつたわね。素朴な子の持つべきだつたね。

—— 父は子ども時代、継母とうまく行かなくて不幸だったから、家の中で母がリードしている感じだったわ。わが家は三人がお互いを干渉しないの。（私の世代では）変わった家庭環境だったと思うわ。

—— 私は外國育ちのせいか、おひなさまのような古い（日本の）ものに馴染めない。自分の国という感覚があまりないので。中途半端な人間よね。

—— 坂本 寿美子（さかもと・すみこ）

坂本龍馬家5代目
大正10（1921）年大連生まれ、関東在住。
父・坂本直道、母・（小高）万寿の長女。
父は南満州鉄道（満鉄）ヨーロッパ所長として11年間パリ勤務。父方の祖父は自由民権家坂本直寛、母方は岡山の医師の家系。
10代をパリで過ごす。ヨーロッパで第二次世界大戦が始まり、最後の引き揚げ船で帰国。フランスではフィギュアスケート、帰国後はテニス選手として活躍する。エールフランス、伊勢丹に勤めた。居住は都内だが、戦時中から現在まで軽井沢の別荘暮らしは長い。

—— 前田 由紀枝（まえだ・ゆきえ）
現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬記念館学芸主任

「こぼれ話」—犬歩棒当記(二十一)—

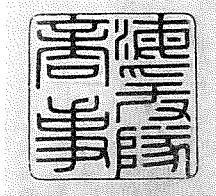
「海援隊商事印」

宮川 祥一

京都国立博物館の収蔵品に
「海援隊商事秘記」という名
前の文書がある。國の重要文
化財だ。長い巻物の後半部に
貼り込まれているもので、慶
応三年の商業記録、たとえば
丹後田辺藩との商業協定文書
や長崎で外国商人からライフル銃を購入した記録がのつて
いる。

学芸員としてこの巻物の取
り扱いには特に気をつかって
いる。なぜならば「海援隊商
事印」という印文が付箋のよ
うに文書に貼り付いているか
らだ。巻物を注意深く開け閉
めしないと印文に折れ目を付
けてしまう。

この印の文字はなかなか素
晴らしいもので、以前から
「ひょっとして」とは思つて
いたのだが、数年前に博物館
に来られた長崎の小曾根吉郎
様とお話しし、さらに史料を
見せていただきたので確信し
た。この「海援隊商事印」は
小曾根乾堂が彫ったものだっ
たのだ。龍馬や海援隊が長崎
でお世話になっていた小曾根
兄弟の長男にして豪商であつ
た乾堂は篆刻家としても有名



海援隊商事印
(京都国立博物館蔵)

だ。しかしそれまで彼の作例
とこれとを比較することはな
かつた。小曾根様が博物館へ
お持ちになつた「三条実美」
印や「伊藤博文」印の押印見
本と見比べたのだが印の外枠
の線の細さや文字の特徴やバ
ランスが完全に一致していた
のだ。この「海援隊商事印」
は現在でも会社印として充分
に使えそうな優れた印文だと
いえよう。

この海援隊商事印を押した
他の文書を知らないが、これ
ほど立派ならばいやでも目に
付くのでそのうち現れるかも
しない。また印そのものも
捨てられるようなものではな
いので、どこかに現存してい
たりはしないものだろうか。
ひとりはしこまがあつたのである。

だ。しかしそれまで彼の作例
とこれとを比較することはな
かつた。小曾根様が博物館へ
お持ちになつた「三条実美」
印や「伊藤博文」印の押印見
本と見比べたのだが印の外枠
の線の細さや文字の特徴やバ
ランスが完全に一致していた
のだ。この「海援隊商事印」
は現在でも会社印として充分
に使えそうな優れた印文だと
いえよう。

平成27年度 第7回現代龍馬学会 総会・研究発表会 テーマ 「龍馬生誕180年・原点再考」



今年は「龍馬生誕180年」という、龍馬ファンのみならず龍馬記念館、当学会にとっても大切な節目の年、今こそ様々な形で「龍馬発信」をしていかねばならない時です。龍馬や関連人物、文化等に焦点をあて、独自の観点で発表し、7回目となる研究発表。基調講演は「坂本龍馬が築いた日本人のプライド」と題して、ノンフィクション作家の小松成美氏が、憧憬の人・龍馬について熱く語ります。その後、龍馬記念館の学芸員を含む6人の先生方がそれぞれの専門分野で解説発表を繰り広げます。

ぜひ会場で「龍馬スピリッツ」を感じていただければ幸いです。 佐々木 恵

日 時：2015年（平成27年）5月23日（土）
場 所：国民宿舎「桂浜荘」地下大会議室
総会 9:00～、研究発表10:00～

研究発表：参加費無料・要申込（先着120名様）。
懇親会：参加費5,000円・要申込

詳細は当館ホームページでも随時お知らせいたします。
お申込み・お問い合わせは坂本龍馬記念館まで。

【基調講演】

こまつ なるみ
小松 成美 氏 ノンフィクション作家・兵庫県立大学客員教授

「坂本龍馬が築いた日本人のプライド」

■小松成美さんよりコメント

この度は、第7回現代龍馬学会基調講演にお招き頂き誠に有り難うございます。

高知の方々、龍馬を敬愛し尊敬する方々が集う現代龍馬学会に参加させていただきますことに、大きな喜びと緊張を感じております。

私にとりまして、坂本龍馬は、生涯の憧憬の人であります。龍馬の生き方を思うたび、日本人としての誇りを喚起させられます。

基調講演という大役を与えて頂けたこと、そして土佐の地で皆様にお目にかかるまことを、心から感謝申し上げます。

小松成美

■小松成美さん紹介



小松 成美 (こまつ なるみ)

ノンフィクション作家
兵庫県立大学 客員教授

1962年2月25日神奈川県横浜市生まれ。
専門学校で広告を学び、1982年毎日

広告社へ入社。その後、放送局勤務などを経て、1990年より本格的に執筆を開始する。
主題はスポーツ、映画、音楽、芸術、旅、歴史など多岐にわたる。

情熱的な取材と堅い筆致、磨き抜かれた文章にファンも多い。

2014年4月より、兵庫県立大学 リーディング大学院にて、客員教授を務める。

2014年6月、高知県観光特使就任。近書に「仁左衛門恋し」

（徳間文庫カレッジ）がある。

【発表者】

しばさき よしひろ
柴崎賀広 氏 現代龍馬学会員 世界龍馬楽校主宰

「風頭・龍馬像からのメッセージ」

すずき のりこ
鈴木典子 氏 池道之助5代目

「幕末長崎での出来事から一池道之助日記に観るー」

つばきはら つなお
椿原庸夫 氏 現代龍馬学会員
「日本一の龍馬像を建てた若者たち」に学ぶ

みや えいじ
宮英司 氏 高知大学非常勤講師・一宮幼稚園長

「坂本龍馬は教科書においてどのようにあげられてきたか」

もりもと たくま
森本琢磨 氏 高知市立龍馬の生まれたまち記念館学芸員
「高知市上町における龍馬顕彰の歴史」

かめお みか
亀尾美香 氏 高知県立坂本龍馬記念館主任学芸員

「大石団蔵の幕末・明治」

高知県立坂本龍馬記念館 TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830 <http://ryoma-kinenkan.jp>